



Title	フランスで出版された女性のための知的啓蒙書(1650～1800年)に関する一研究：その特徴及び時代背景から19世紀への継承まで
Author(s)	小山, 美沙子
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49088
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 小 山 美 沙 子

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 2 2 3 1 2 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 20 年 3 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 2 項該当

学 位 論 文 名 フランスで出版された女性のための知的啓蒙書（1650～1800 年）に関する研究—その特徴及び時代背景から 19 世紀への継承まで—

論 文 審 査 委 員 (主査)
教 授 柏 木 隆 雄

(副査)
教 授 荻 野 美 穂 教 授 和 田 章 男

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は 1650 年から 1800 年かけてフランスにおいて出版された女性のための知的啓蒙書の実態について、時代背景や出版事情にも触れつつ、それらの内容と意義を明らかにしようとするものである。女子の公的教育が漸く充実する 19 世紀後半への展望をも含めてヨーロッパにおける女性史や女子教育史、出版史をも覆うもので、A4 判 254 頁。序と全 4 章 27 節及び結論からなる。

第 1 章は 17－18 世紀の女子の公教育を概観、一般には寄宿学校など一部を除いて嗜みの域を出ないものであり、一方上層階級の女性たちには幅広い知識と高い教養に接近していた例のあることを明らかにし、この時代における一般的な女子公教育の貧困の底辺にある女性のための知的啓蒙書の存在の検討およびその意義を述べる。

第 2 章では、女性の知的啓蒙書出版の背景にある 17 世紀から 18 世紀にかけてのサロン文化などの社会環境と、その対極にある反女性教育の風潮を検討、ルネサンス以来女性に見られる学術志向の高まりや、サロンにおける社交生活での幅広い教養の必要が、女性の知への接近を後押したことを確認し、女性の知育を重要視する主張の中に、知を尊重し発展させる時代精神を見て、それが 19 世紀での文学、科学の飛躍の進展、さらには公的教育の充実の先駆けとなったことを説く。

第 3 章は本論の中核となるもので、17 世紀－18 世紀における知識の普及書の状況を一通り見て、それらが 18 世紀末の女性用百科事典に結実していく様を、具体的な資料や文献の紹介、読解、分析を通じて明らかにする。そして女性用の知的啓蒙書の代表的な 37 点をさまざまな角度から検討する。現実としては知における性差はあるものの、社交界の男女や青少年を対象に知的啓蒙書が多数出版されるようになり、特に「女性用」を強調するものもあった。数学、物理学、化学さらに医学にも及ぶ文字通り百科にわたる多様な分野について知識を提供した *Bibliothèque universelle des dames* はその代表的なもので、当時の著名な学者、知識人を執筆者としたこの叢書は、18 世紀啓蒙思想の体現とも言え、医学や生理学など新しい知識を簡潔、明快に表現するなど画期的な面を示す。また他の 36 点も含め、全体として知的啓蒙書の著者、出版状況、版の大きさ、読書層、表現形式などについても、精査した結果を詳述する。

第 4 章は、前章で検討した叢書類の 19 世紀前半における再版状況を見て、当該世紀初頭の父権優位の反動的施策においても前世紀の知的精神と女性啓蒙の意図を継承する証が、それら叢書の改訂、再版の姿に見られるとし、結論の部分で今回十分に論じられなかった 19 世紀以降の女作用知的啓蒙書の分析、およびその展望を示す。

論文審査の結果の要旨

フランスにおける公教育が一般的になったのは、フランス革命以後、ナポレオンの施策などによるが、それは男子に限ってであって、1867 年ヴィクトール・デュリによって女子教育が公的な形で始められるまで、修道院に付属する寄宿舎で行われる程度であった。大学は 19 世紀初めに高等教育を担うことになるが、それも男子に限られて、女子の入学は前提されていなかった。しかし知への意欲は男女に隔てがあるわけではない。公的な教育手段が無い場合、読書が知を得る最大的手段となる。本論文の著者は 19 世紀末に発刊された女性に向けた百科全書を眼にして、当時の女性の知育と啓蒙書との関係に興味を抱き、以後関連する書物や文献を渉猟、こうした書物が 19 世紀だけの現象でなく、フランス・ルネサンスと称される知的曙の頃から、女性の知育に意を寄せる男性識者や、その身分、環境から知性を磨くことのできた行動的な女性の手によってそれらが出版されたこと、とりわけ 18 世紀には百科全書の流行に見るように、さまざまな種類、ジャンルにわたっての啓蒙書が、男女両性によって執筆されて普及していた事実を、内外の文献調査で明らかにしようとしたものである。

本論の評価すべき第一は、日仏双方においてまだ十分に開拓されていないこの分野に取り組み、克明な調査を行って、ほぼ当該期間に出版された女性用知的啓蒙書の実況を明らかにしえた点である。それも単なる紹介的な二次資料に頼ることなく、直接一次資料にあたって内容を把握し、それらを整理して 19 世紀前半に至るまでのフランスにおける啓蒙書、とりわけ女性を読者とした出版物について、一つの確実な鳥瞰図を作りえたことである。とりわけ第 3 章の *Bibliothèque universelle des dames* についての克明な記録は、論者自身がその存在の大きさに気づき、それに接した時の深い感動を映すように、丁寧に調査されその意義を顕彰している。

評価すべき第二は、そうした啓蒙書の紹介において、つい女性用だけに対象が偏りがちなのを、男性読者を対象とした著作をも視野にいれて、論述が狭隘になることを防いでいる点である。また百科事典を編纂した編者や各項目の執筆者について、出来る限り調査を行い、今は忘れられている彼らを掘り起こし、顕彰していることである。ディドロの有名な『百科全書』ばかりでなく、多くの小さな刊行物を詳細な記述で取り上げたことも本論の特色である。

そうした研究方法および実践についての評価とともに、本論の構成がしっかりしていて、論述のスタイルが揺るがず、一定のリズムで叙述されて、この長大な論文を一通り読ませる筆力も評価したい。とりわけ第 2 章、第 3 章に見られるように、注記が充実し、そのため本文とのバランスもよく取れたものとなっている。また本来論者は 19 世紀前半から後半にかけてのフランスの女性教育、そしてその基盤となる啓蒙書、知的普及書の研究を目指したと言い、本論もそのテーマへの前提としてその淵源から調査し始めたが、それが膨大になって、ひとまず 19 世紀に至るまでを論じることになった。しかし、そのためかえって論としてのまとまりを得るとともに、18 世紀のこの問題の重要性も明らかになったし、さらに出版が飛躍的に発達する 19 世紀での同種の書物研究の意義が強調されるという利点を得ることになった。

以上本論の評価すべき点の多々あることを述べたが、欲を言えば、女性の啓蒙書にテーマを絞ったことは理解できるし、成果もあったことは認めるものの、その文体、執筆の姿勢がややパタン化して、いささか紋切り型の印象を与える。その紋切り型を超えたところで、各種叢書の特徴を示してほしかったこと、また同じテーマでの男性読者を意識した書物のスタイルとの相違を示せば、もっと論者が扱う叢書の特徴が明らかになっただろう。また読書体験における性差と階層差をほぼ同レベルで論じるところがあるが、これはもう少し深く掘り下げる必要があるだろう。以上の望蜀の感はあるものの、本論文が類例のない研究分野での豊かな成果であることは疑いなく、博士（文学）の学位にふさわしいものであることを認定する。